

相互性としてのケア —かかわりが育む家族、教育、医療のナラティブ—

竹家 一美・竹内 みちる・鮫島 輝美・西山 直子・竹内 一真

1. 研究目的

近年わが国では、ケア役割やケアの質の重要性が、改めて問い直されるようになってきた。長寿社会の到来による要介護高齢者の増加や、大規模な自然災害、事故や犯罪等の多発、そして深刻な不況による失業者の急増など、ケアを必要とする人々の増加を背景に、ケアは医療・福祉の場のみならず、個々人の生活の場においても必要とされる状況となった。「ケア」については、従来、よりよいケアの実現を目的としてケアを受ける人々、すなわち高齢者や子ども、障害者や患者、被災者などを対象とした研究が行われ、有用な知見が蓄積されてきた。しかし「ケア」という営みが、より本質的な意味において我々の「生活／人生(life)」に不可欠なものと考えらるならば、それだけでは不十分である。より日常的な家庭、職場、教育や文化等の場で営まれる「ケア」について、ケアされる側のみならずケアする側にも焦点をあてながら、ケアを軸とした人間の生涯発達や、ケアの意味というものを、多次元的に検討していくことが必要である。

そこで本コロキウムでは、この「ケア」の営みを多次元的に検討し、人生における「ケア」の意味について理解を深めることを第1の目的とした。これは、ケアを「人と人のかかわりによって生成される人間の本質的な力」と広義に捉え、ケアが生まれる精神性とケア実践による変化・発達の諸相を、ケアする側に焦点化しつつ、ケアする人とケアされる人のかかわりの中でみようとする試みである。その際、我々は Erikson (1950/1963)の「相互性(mutuality)」概念、——「する人／される人」といった単純な二項対立的ではない、一見して明白な上下関係の内に、実は双方の心を内的に活性化させる力が潜んでいる関係性——を視座とした。この見方によれば、双方はそのかかわりの質において同等であり、「ケアすると同時にケアされる」という図式が成り立つ。ところで、こうした関係性の観点は、教育や発達領域だけでなく、最近では、医療の場においても注目されている。それが、医療・医学を「語り、物語(narrative)」という観点から全面的に見直そうとする「Narrative Based medicine (NBM)」である。NBM では、医者と患者は専門家 - 素人という役割に縛られることなく、専門家が患者から教わることで協

働する関係性が発展する。その意味で、NBM は、相互性を視座とする本コロキアムの研究に極めて親和性が高く、NBM の習得・理解は我々にとって価値あることと思われる。よって、本コロキアムでは、ケアの営みの多次的検討に向けて NBM の実践を理解し、相互性の観点から医療におけるナラティブの意義を考察することを第2の目的とした。

2. 研究報告

(1) 文献読書会と学会企画

① 文献読書会

まず、我々の理論的視座となっている Erikson の「相互性(mutuality)」および「generativity」「ケア」といった概念について理解を深めることを目的として、各人が抱くそれぞれの概念イメージを互いに発表しあった。同じ Erikson の理論を拠り所としていても、その解釈や理解は各人で微妙にズレと重なりを含んでおり、統一の見解を導くために意見を闘わせた。その議論のプロセスのなかで、そもそも Erikson(1950/1963) がライフサイクル論として提唱した「漸成的発達図式(epigenetic chart)」(図 1)の解釈の違いをめぐる問題が浮上し、原典の理解の深化が不可欠であることが判明した。そのため、Erikson の晩年の著作であり、彼のライフサイクル論全体を概観していながら、成人期以降の心理社会的発達に特に詳しい『vital involvement in old age』(1986)を取り上げ、講読することにした。これは、『老年期：生き生きしたかわりあい』(1990)として邦訳がすでに出版されているものであるが、我々は、訳文を参考にしつつも Erikson 自身の言葉で綴られた原著を読むことで、彼の理論・概念の根幹に迫ることを目指した。

圖式 2 心理・社会的危機									
老年期	VIII							統合 対 絶望、嫉悪 英知	
成人期	VII						生殖性 対 停滞 世后		
前成人期	VI					親密 対 孤立 愛			
青年期	V				同一性 対 同一性混乱 忠誠				
学童期	IV			勤勉性 対 劣等感 適格					
遊戯期	III		自主性 対 罪悪感 目的						
幼児期初期	II		自律性 対 恥、疑惑 意志						
乳児期	I	基本的信頼 対 基本的不信 希望							
		1	2	3	4	5	6	7	8

図1 (エリクソン,E.H.・エリクソン,J.M. (2001). 村瀬孝雄・近藤邦夫[訳]. ライフサイクル、その 完結 (増補版). 東京：みすず書房. p73 より引用)

略)が加わり、新鮮な視点と深い洞察を提供してくれた。特に、精神分析家であり自我心理学派に属する Erikson の背景を理解するうえで、堀家は臨床心理学と生涯発達心理学を結ぶ架け橋としての役割を担い、議論の深まりに大いなる貢献を果たした。

次に、具体的にどのように文献読書会が進められたかを報告する。まず、Erikson のライフサイクル論全体を概観するため、第1章第4節“Stage for Stage: Epigenesis”(担当：堀家)を詳しく読み込んだ。ここでは、邦訳版における訳文と原文との丁寧な照合が試みられ、Erikson の母語であるドイツ語の知識と臨床心理学の基礎知識を駆使して、新たな訂正訳が提出された。これを受けて、Erikson の理論の基盤にある漸成的な考え方、相対するものの力動的均衡、心理社会的危機の意味、社会とのかかわりあいなどについて議論がなされた。そして、この議論から、Erikson 理論を視座として研究することの意義や、社会の側からの Erikson 理論に対する要請について考えていくことが課題として浮かび上がってきた。

さらに、特に本コロキアムのテーマである「ケア」に関わりの深い、成人期中期以降の発達を取り扱った第2章第1節“Integrity and Despair: Wisdom”(担当：西山)と第2節“Generativity and Stagnation: Care”(担当：竹家)を続けて読み、他の Erikson の著作(Erikson, 1963; 1964; 1982)等も参考にしながら、概念の理解に努めた。この二つの節で議論の焦点になったのは、「generativity」と「ケア」の関連、より広義の「grand-generativity」についてであった。Erikson(1982)の説明によれば、「漸成的発達図式(epigenetic chart)」

(図1)のなかで、第Ⅶ段階成人中期の心理社会的課題として generativity があげられ、stagnation (停滞) 或は self-absorption (自己耽溺) と対立するとされる。そして、この対立命題が達成されたときに獲得される人格的活力(Virtue ; 徳)が「Care」(世話、気づかい、はぐくみ)なのである。この「ケア」という言葉は、直接的に子どもを産み育てることだけでなく、これまで大切に(care for)してきた人や物や観念の面倒を見る(take care of)ことへの、より広範なかかわりあいを意味している(Erikson, E.H. & Erikson, J.M., 1982)。ところが、我々は、停滞するとはどういうことか、自己耽溺とはどういうことかについて議論していくうちに、Erikson とは異なる発達の筋道を考えはじめるようになった。それは、人間関係に行き詰まって停滞することなく、自分の利益のみを追求する自己耽溺に陥ることなく、「次の世代や自分が生み出したものを信頼し気づかい見守りはぐくんでいく傾性」(やまだ, 2003)である generativity を十分に発揮するためには、「ケア」の営みを経験することが必要である、というものである。元来の Erikson 理論との違いは、generativity と stagnation(或は self-absorption)との相克から「ケア」という特質が獲得されるのではなく、他者を「ケア」という営みを通してこそ、generativity が備わってくる、という因果関係の違いである。ここには、「他者をケアすることによって自らも成長する」という相互性(mutuality)の概念が反映されている。

また、邦訳では「祖父母の生殖性」と訳されている“grand-generativity”についても、議論が巻き起こった。まず、“grand”を「祖父母的」と血縁関係を連想させるような表

現にしてしまうと、人やものに限らず社会全体や環境にまで大きく広がった未来に対する generativity という本来の意味を狭めてしまう恐れがあることが指摘された。この“grand”の意味は、「世界を維持するための中年期の直接的な責任を越えるもの(beyond middle age's direct responsibility for maintaining the world)」(Erikson, 1986, pp.74)として、具体的な人やものに限定されない、間接的で観念的なものとしてとらえるべきではないかと我々は考えた。

また、そもそもの“generativity”の訳語についても、本邦においては「生殖性」「世代性」「生成継承性」などと様々な表現が用いられ、いまだ定訳は決まっていないが、どれも Erikson が含意した豊かな概念すべてを的確には表現しえていないのではないかと、との疑問が呈された。原典に立ち返るならば、generativity とは、generate（生み出す）と generation（世代）とを掛け合わせた Erikson の造語で、子孫を生み出すこと(procreativity)や生産性(productivity)、創造性(creativity)といった類似概念を包摂するものである。初期の著作(Erikson, 1950/1963)においては、これを「次の世代を確立させ、導くことへの関心(the concern in establishing and guiding the next generation)」と Erikson は定義している。そして、後期の著作(Erikson et al., 1982)においては、「(自分自身の)更なる同一性(identity)の開発に関わる一種の自己 - 生殖(self-generation)も含めて、新しい存在や新しい製作物や新しい観念を生み出すこと」というように、ライフサイクル論の展開とともにこの概念も拡がりを見せている。さらに、generativity の本質ともいうべきケア（世話）することの経験が、各人生段階をまとめてひとつの人生のサイクルを創り出し、その世代に生命を与えた世代（親世代）とその世代が生命を育む責任のある世代（子世代）の三代を結びつけ、世代的ライフサイクルを創り出すという(Erikson et al., 1986)。このように多様で含蓄に富む“generativity”概念を、ひとつの言葉で表現するのは困難を極めることはわかっているものの、新訳の検討が今後の課題として残された。

② 学会企画

上記の文献読書会での議論を踏まえて、2010 年 3 月末に神戸国際会議場で開かれる日本発達心理学会第 21 回大会において、本コロキアムの成果を発表すべく、自主ラウンドテーブルを行うことを企画した。企画の柱としては、文献講読するなかで浮上した二つの課題、すなわち、1) Erikson 理論を視座として研究することの社会的意義、2)「ケア」の営みを通して世代と世代とを結ぶ generativity 概念の再考、が掲げられている。題目は、『現代社会における generativity の可能性——今、なぜ世代と世代をつなぐことを問題とするのか？——』とし、話題提供者として西山・竹家・竹内（一）の三人が登壇する。三人はそれぞれ、「祖母—母—娘」三代の関係性における generativity：中年期母世代に焦点を当てて（西山）、[子どものいない中年期女性の generativity：語られたライフストーリーの分析から]（竹家）、[技能伝承を伝承者の視点で捉えなおす必要性：社会文化的アプローチから generativity への接近]（竹内（一））と題して、自身の研究テーマに引きつけながら generativity について論じ、会場の方々からも意見を伺う予定で

ある。日本発達心理学会大会には、研究者だけでなく、子どもをもつ保護者、保育士や教師といった教育関係者、臨床に携わるカウンセラー、臨床心理士、看護師等、様々な立場の来場者が訪れる。家族・教育・医療の現場で日々かかわりをはぐくんでいる方々である。本コロキウムにおいて議論したこと・考えたことが、来場者の方々にどのように受けとめられるか、社会一般の方々からどのような反応が得られるか、見ものである。この日本発達心理学会第21回大会での自主ラウンドテーブル企画をもって、今年度の本コロキウムの活動の集大成にしたいと考えている。

(2) フィールド調査と共同研究会

本コロキウムのフィールド調査および共同研究会は竹内（一）(M2)と堀家(M1)という二人の修士課程の学生における研究構想やデータ検討などを中心に、ほかの参加者が自らのフィールドの説明や研究の紹介などをし、共同の研究会を進めていくという形で行われた。そこで、本節ではこの竹内（一）と堀家の二人の修士課程の学生に焦点を当てて、どのようにフィールド調査や共同研究会が行われたのかを報告していく。

竹内（一）が対象としたのは日本舞踊の中でも特に地唄舞とよばれる舞い方を重視する流派、「篠塚流」である。篠塚流は京舞と呼ばれる京都独特の日本舞踊を舞う流派の一つでもあり、現在祇園で隆盛を極めている「井上流」が栄える以前はむしろ、この篠塚流が京舞のスタンダードとして認知されていた（守屋、1984）。竹内（一）はこの篠塚流の中でも家元であり、かつ多くの弟子を排出する伝承者である篠塚瑞穂氏を対象に研究を実施した。研究では瑞穂氏が自らの技能を伝える稽古場面を中心に「どのように自らの経験を伝えているのか」という観点から参与観察を行い、同時にその伝えている経験を「世代間の関係の中にどのように意味づけているのか」という観点からライフストーリーインタビューを実施した。このように参与観察とライフストーリーインタビューを同時に実施するという点、そして、世代間の関係性という観点からライフストーリーを分析するという質的研究としても新たな視点を提示するものであったと言えよう。

フィールド調査の報告ではこの竹内（一）のフィールドを中心に議論を行ったわけであるが、伝承という「師匠—弟子」の相互性を明らかにするというテーマであったため、この相互性といったテーマやそこで得たデータをどのように分析していくのかという点などを主軸にほかの参加者のフィールドからの示唆や報告などが研究会でなされた。

特に活発に議論が交わされたのがデータ分析であろう。このデータ分析では先に示したように参与観察とライフストーリーインタビューをつなぎ合わせるという点、そして、世代間の関係性を対象とする点などこれまでの質的研究、或は相互性に関する研究においても新たな視点を提示するものであった。そのため、参与観察とライフストーリーを重ね合わせていく際の手法や論理構成などに関しては参加者から積極的な意見交換が行われた。この意見交換の中で参加者のそれぞれのフィールドに関しての報告や分析の仕方などが報告され、その相互のフィールドに関する報告および分析の仕方に関する意

見などからそれぞれの類似しながらも、異なる立場を確認することができた。特に本コロキウムではイメージ画の分析やインタビューの分析など多様な手法から当事者の「語り」に迫っている。このような「語り」におけるそれぞれの多様な手法を報告し、そして相互に確認しながら新たな手法における難しさや気をつけなければならない点などを指摘しあうことで参加者全員が質的研究あるいは「語り」における可能性などを見つめ直すきっかけともなったといえよう。

さらに相互性というテーマからはEriksonのgenerativityと本研究の関係に関して議論が交わされた。Eriksonはいち早く「生涯」を対象に発達心理学を構想した研究者であるが、同時に自らの生涯発達のモデルの中に「次世代継承」の重要性を考慮していた研究者でもある(Erikson, 1950/1963)。竹内(一)の研究ではこのgenerativityに関して伝統芸能の伝承という観点から迫っていくという視点を提示しており、このようなアプローチの仕方の妥当性やオリジナリティなどに関して議論された。本コロキウムのメンバーでは、祖母―母―娘といった三世代にわたる関係性を研究する者(西山)や、不妊治療を経ても子どもが得られなかった女性の心理的過程を研究する者(竹家)がいて、伝統芸能の伝承という対象においてgenerativity研究を位置づける際の問題点などについてそれぞれの研究の立場から興味深い指摘を得ることができた。

基本的に本コロキウムでは、このような竹内(一)の修士論文執筆にむけたフィールド調査に基づく共同研究会が中心とされたが、堀家の修士論文構想に関しても同様に共同研究会が実施された。

堀家が研究の対象にしようとしていたのは、「いじめられた体験」から、どのように回復し、現在、その体験をどのようなものとして意味づけているのかということを明らかにしようというものであり、研究手法としては青年期の大学生を対象としてインタビューを行うという考えをもっていた。構想段階での検討会であったことから、「いじめられた体験」をデータ収集する際の難しさや研究の位置づけ、或は「もっとこうしたらよいのではないか」というリサーチデザイン全般に至る議論がなされた。

特に、「いじめられた体験」を扱うことの倫理的な難しさについては、議論に多くの時間を費やした。このような当事者にとってネガティブな体験はインタビューにとっては聞かれたくない質問である可能性が高い。不妊の語りを扱ってきた竹家は自らのフィールドを紹介しながら、語りを引き出すことの難しさや承諾をどのように取るのかといった注意点について意見をしていた。このように、語りを扱うことについての難しさや倫理的な問題などは実際に、その困難さに直面していたからこそ、提案できるものであり、非常に示唆に富むものであった。

このような語りを引き出す困難さについての議論の中で、リサーチデザイン全般に至る議論もなされた。それは大学生を対象とするのではなく、いじめられ体験をもとに現在、社会的貢献をされているような人を対象にアレンジするという方向性もあるのではないかという議論である。例えば「いじめ駆け込み寺⁽¹⁾」のような団体では、実際にい

じめられた体験をもつ人が、現在被害を受けて苦しんでいる人の相談にのる窓口を設置している。このような団体に所属する人であるならば、いじめに関して語ることの抵抗はそれほどないのではないかという意見がでてきた。このような意見は「自らの体験を次の世代に伝える」というテーマであり、generativity や相互性などに関する Erikson の読書会や共同研究会などが生きた提案であったといえよう。堀家はこれらの意見をもとに自らの研究の方向性などについて考えを深めていた。

以上のように、本コロキウムで行われたフィールド調査・共同研究会は、堀家と竹内（一）を中心としていきながら、博士課程のメンバーが実際に調査してきた対象や方法などを紹介することを通じて研究のやり方を教授するという形で行われた。このようなやり方により Erikson の generativity や相互性、或は語りを研究することの難しさや特徴などに関して参加者全員に深い理解が得られたと言える。また、共同研究会における学びそのものも、自らの経験を他者に伝え生成的に受け継ぐ generativity 概念や、議論のなかで互いに高め合う相互性を体現したものと言えよう。

（３）国内外の学会および NBM 国際 WS・シンポジウムへの参加・発表

上述のように、我々は、文献読書会、フィールド調査、共同研究会等を通じて、本コロキウムの研究目的を達成すべく、鋭意努めてきた。ただし、我々はメンバー間で内向きに知見を共有し、研鑽を積んできただけではない。日本発達心理学会第 21 回大会（2010 年 3 月）における自主ラウンドテーブルを企画し、集大成として位置づけている旨は第 2 節 1 項の②で述べた通りだが、他にも各メンバーは 1 年間を通し、国内および国際学会において積極的に研究報告を行った。それぞれの場で得た知見や示唆、新たな気づきや刺激は、メンバー個人によってコロキウムの場に持ち込まれ、我々の知の共有となり、議論の糧となった。背景や専門性を異にする学会で生成された知の集積は、間違いなく我々の議論を深化させ、本コロキウムの遂行に寄与したものと思われる。

なかでも、英国ロンドンで開催された NBM 国際ワークショップ(WS)およびシンポジウムへの参加・発表は、現に参加した者はもとより、メンバー全員にとっても貴重な知見をもたらすものとなった。第 1 節でも述べた通り、我々はケアの営みを多次的に検討するため NBM(Narrative Based Medicine)の実践を理解し、相互性の観点から医療におけるナラティブの意義を考察することを目的の 1 つに掲げた。それは人と人との、そのかわりの質において同等であるとみなす「相互性」の立場と、NBM の本質的な姿勢との親和性の高さを認識したためである。すなわち、医者と患者が、専門家 - 素人という役割を認めながらもそれに縛られることなく、ナラティブの文脈の下、「専門性」と「無知の姿勢」とを併存させ、専門家が患者から教わることで協働する関係性を発展させる NBM（江口・斎藤・野村, 2006）から、相互性としてのケアを捉えるうえで有用な示唆を得られると期したのである。はたして、その期待は裏切られることなく NBM の理論的・方法論的視座、およびその実践の理解を通じて、我々は「相互性としてのケア」

の有用性を改めて確認することができた。特に、長い間、地域医療をフィールドとし、地域住民でもある医師や介護者、関係者の語りを聞き取ってきた竹内（み）と鮫島にとっては、NBM はまさに自らのフィールドにおける営みと重なる側面も多く、自らの調査研究を改めて価値づけるものとなった。以下に、ロンドンでの NBM 関連の学びの場における本コロキウムメンバーの具体的な関与を示し、いかにして我々が NBM に触れ、NBM の有用性を実感したか、という点を記述する。

今回 NBM 国際 WS およびシンポジウムに参加するため渡英したのは、竹家・西山・竹内（一）の 3 名であった（2009 年 6 月 30 日～7 月 3 日）⁽²⁾。3 名は、英国における NBM の第一人者である Prof. T. Greenhalgh 主催のシンポジウム(Symposium on Narrative Research in Health and Illness)に出席し、自らの研究を発表する機会に恵まれた。また、NBM の実践者で家族療法家でもある Dr. J. Launer の WS(Narrative Skills for Clinical Teachers)に参加し、NBM の神髄を体験する好機を得た。他にも幾つかの NBM に関連するプログラムを経て、我々 3 名は、NBM と「相互性としてのケア」に通底する基本的なものの見方や、人と人とのかかわり方、ナラティヴ（語り、物語）の力を、身をもって理解するに至った。一方で、もちろん驚きとともに知る新たな知識や、初めて見るプラグマティックな技法なども多々あり、彼我の差異を認識すると同時に、大いに刺激を受けた。今回の英国でのすべての経験は、今後の我々の研究に、有形無形に影響を及ぼし、次なる一步への原動力になるものと確信している。

NBM について学んだことは数々あるが、その概念を一言で定義するのは非常に難しい。医学・医療の場で主流とされてきた「Evidence Based Medicine(EBM)」に対して、それへの反省を促し、補完的に位置づけられる概念であり、実践であるということはいえるだろう。NBM は、「人間はそれぞれ、自分の「物語り(narrative)」を生きており、「病氣」もまた、その物語りの一部である。しかし、現状の医学においては病氣も、患者の物語りも、患者自身でさえ、臨床の現場から疎外され、ただの「疾患名」をもった対象にしか見られない。非常に難しい治療、重度障害、高齢者ケアなどの場合、患者の語る物語りに傾聴しないことは、その人の人生の破壊にすらつながってしまう危険性をもつ」(Greenhalgh & Hurwitz, 1998)と警鐘を鳴らす。もとより、医師でもない我々が数日間の体験でもって、NBM を本当の意味で体得したとは到底いえるものではない。しかし、その根底にあるエッセンス、すなわち、人と人とはそのかかわりの質において同等であること、さらには、その人と人をつなぐ架け橋となるものが「ナラティヴ」であることへの理解は、十分に深まったといえる。患者のナラティヴに耳を傾ける姿勢は、ほかでもない本コロキウムが依拠する Erikson の発達観、換言すれば、「育てると同時に育てられる、教えると同時に教えられる、ケアすると同時にケアされる」という「相互性」に通ずるものと考えられる。従来の「医師 - 患者」パラダイムを脱する関係性へと注がれるその眼差しは、まさに本コロキウムが捉えようとする関係性と軌を一にする。つまり、上下関係的な切り口で「親 - 子」「師匠 - 弟子」「ケアする人 - ケアされる人」

の関係をみるのではなく、双方のかかわりの中で、ケアの営みを捉えようとする視点である。翻ってそれは、本コロキウム研究の理論的視座である「相互性としてのケア」の意義の証左につながる。この点を確認し得ただけでも、今回の経験は、我々にとって大きな意味があったといえ、研究を継続するうえで確かな光明を得た思いであった。

3. 結びと今後の課題

以上述べてきたように、我々は「相互性としてのケア」を理論的視座として、今年度研究開発コロキウムを遂行してきた。Erikson の発達観を理論的支柱とし、彼の「相互性(mutuality)」概念に依拠してケアの営みを捉えようとした我々は、NBMを学ぶことで、さらにその意義を深めた。しかし一方、我々がフィールド(現場)に身を置く時、ポジティブな側面だけでは語れない「ケアの現実」がそこにあることもまた、事実である。

本稿の結びとして、そのような現実も視野に入れながら、本コロキウムを通して浮上した幾つかの課題を大きく2つにまとめ、今後の研究につなげたい。

まず1つは、Erikson 理論をレビューする中で立ち現れた、オリジナルとは異なる発達の筋道の探究である。Erikson によれば「ケア」とは、成人中期の心理社会的危機である generativity vs. stagnation (停滞) 或は self-absorption (自己耽溺) の相克の末、前者が後者を凌駕した場合に獲得される人格的活力 (Virtue ; 徳) であった。これに対し我々は、他者を「ケア」という営みを通してこそ、generativity が育まれるのではないかと考えた。それは、フィールドからの示唆であり、我々はそう考える方がむしろ「他者をケアすることによって自らも成長する」という相互性の精神に合致するのではないかと考えたのである。竹内(み)と鮫島が、地域医療のフィールドで出会った介護者たちの語り、すなわち、介護を負担ではなく自分の「成長・学びの場」とであると受け止め、積極的に引き受ける語りは、そうした発達の筋道を例証するものといえる。

もう1つは、「ケア」の複雑性、多面性をどのように捉えていくかという問題である。確かに我々は、相互性の観点から「ケア」が人の発達・成長を促す力になり得ることは認めている。だが一方で、「ケア」がそうした肯定面に収束しきれない複雑な多面性を孕むこともまた、フィールド調査を通してみてきた。人と人とのかかわりの中で生じる悲惨な事故や事件、援助職に多発するという「バーンアウト」など、ケアをめぐるネガティブな事例は枚挙にいとまがない。こうした現場の声をどのように掬い上げていくのか。また「生涯」という長い時間軸でみたときに、その負の部分も含めてケアすることの意味が、その人の人生の中でどのように変容し語り直されていくのか。我々は、今後もそのような現実的側面から目を逸らすことなく、「ケア」の営みをより多次的に捉えていきたいと考えている。そのために必要なことは何か、まずはそこから見つめ直し考えていきたい。

注

- (1) いじめ駆け込み寺 <http://izime.jp/> (2009 年 1 月 22 日習得)。
- (2) (主催) 科学研究費プロジェクト 代表 山田洋子 (基盤研究 A) 多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発 (共催) 京都大学グローバル COE「心が活きる教育のための国際拠点」ユニット C「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」による〈ロンドン・プロジェクト—医療と心理支援の多文化ナラティブ方法の探求〉

引用文献

- 江口重幸・斎藤清二・野村直樹. (2006). ナラティブと医療. 東京：金剛出版.
- Erikson, E. H. (1950/1963). *Childhood and society*. New York: W.W.Norton & Company. [仁科弥生 [訳]. (1977-1980). 幼児期と社会. 東京：みすず書房.]
- Erikson, E.H. (1964). *Insight and Responsibility*. New York: W.W.Norton & Company. [鑓幹八郎 [訳]. (1971). 洞察と責任. 東京：誠信書房.]
- Erikson, E.H. & Erikson, J.M. (1982). *The Life Cycle Completed: A REVIEW*. New York: W.W.Norton. [村瀬孝雄・近藤邦夫 [訳]. (2001). ライフサイクル、その完結〈増補版〉. 東京：みすず書房.]
- Erikson, E.H., Erikson, J.M. & Kivnick, H.Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W.W.Norton. [朝長正徳・朝長梨枝子 [訳]. (1990). 老年期——生き生きしたかかわりあい. 東京：みすず書房.]
- Greenhalgh, T. & Hurwitz, B. (Eds.). (1998). *Narrative Based Medicine: Dialogue and discourse in clinical practice*. BMJ Books. [斎藤清二・山本和利・岸本寛史 [監訳]. (2001). ナラティブ・ベイスト・メディスン 臨床における物語りと対話. 東京：金剛出版.]
- 守屋毅. (1984). 京の芸能. 東京：中央公論社.
- やまだようこ. (2003). 訳語について (生成継承性 generativity の項). [フリードマン, L.J. [著]. エリクソンの人生：アイデンティティの探求者. やまだようこ・西平直 [監訳]. 東京：新曜社.]